

阿部民子

Abe Tamiko

illustration: Shigeyuki Sakata

復興から次ステージへと歩み出した2つの「新しいまち」

岩手県大船渡市・市営住宅野々田アパート
宮城県東松島市・東矢本駅北地区・市営あおい住宅 (2016年◆平成28年)



夏休みに入って間もない7月27日。東北の2つのまちで、住民と関係者にとって思い入れの深い2つの式典が開かれた。会場が設けられたのは、岩手県の大船渡市と宮城県の東松島市。ともに、東日本大震災で甚大な被害を蒙ったまちだ。震災から約5年4カ月。その日は、復興の新たな門出を祝う記念すべき一日になった。

復興の鍵を開ける住宅の完成

式典の一つ、岩手県大船渡市で開かれたのは、震災で家を失った人々のために建設された災害公営住宅の完成を祝う式典だ。まちの中心部のほとんどを津波に流された大船渡市では、復興に向けた大規模なまちづくりが進行中だ。以前よりかさ上げした大船渡駅周辺では、この3月にホテルや駅前ロータリーとなる交通広場が完成。その後も、大型スーパーマーケットや商店街などが続々オープンし、かつてのにぎわいが戻りつつある。

今回の式典は、その中心部に建つ野々田アパートの完成を祝ったもの。一日も早い住宅再建を期す

る大船渡市は、UR都市機構と協力協定を結び、災害公営住宅整備に尽力してきた。この協定に基づく全14地区、227戸におよぶ整備は、7月に野々田アパートが完成したことですべて完了。この日を待ち望んだ人々の、新しい暮らしの舞台がようやく整ったことになる。

真新しいアパートの集会所で開かれた式典では、UR都市機構若手震災復興支援本部長森本剛から戸田公明大船渡市長へと、完成を記念した鍵のレプリカが贈呈された。

リボンがかけられた大きな鍵を手にして、戸田市長は感慨深げな面持ちで語った。

「この市営野々田アパートの完成は、市が復興の最優先課題のひとつとして取り組んできた『住まいの再建』における大きな節目になります。この鍵の重みは、URを始めとする関係者の知恵と汗が凝縮されたもの。そして、復興の次のステージを開ける鍵でもあります」

日本一幸せなまちづくりに

もう一つの式典が行われたの

いかわからないとき、URさんには災害支援の経験に基づくアドバイスや陣頭指揮、現場での監督をしていただいた。今日の日のを迎えられて、感慨無量です」と、その日々を振り返る。

UR都市機構東松島復興支援事務所住宅計画課課長の荒木誠司は、この地区の特徴を「単身の高齢者の方も安心して暮らせるよう、見守りや住民のまなざしが届く配慮をしています。单身世帯の家を囲むように、ファミリー世代の住居を配置するほか、街角に交流スペースや公園を設け、住民が座っておしゃべりをしたり、あいさつができるようにしました」と説明する。

これら大船渡市営野々田アパートや東松島市営あおい住宅など、UR都市機構が、岩手・宮城・福島県の3県から要請を受けて整備を手掛ける災害公営住宅は、この7月で約半数が完成、本年度中には約8割が引き渡しを終える予定だという。復興から新しい暮らしへと、人々の暮らしは第二ステージに踏み出すことになる。

あおい地区のまちづくりを推進



は、そこから約120キロ離れた宮城県東松島市。名前のとおり、風光明媚で知られる松島の東に位置し、ブルーインパルスが所属する航空自衛隊松島基地があるこの地は、東日本大震災で実は74%もの住戸が全半壊するという壊滅的な打撃を受けた。

式典の会場が設けられた、東矢本駅北(あおい)地区は、被災した人々の防災集団移転団地としてUR都市機構が市から整備を一括して受託、まちづくりを進めてきた地区だ。自立再建の一戸建て用地273区画と災害公営住宅307戸、東京ドーム約4・7個分という規模は、市内でも最大。JR仙石線「東矢本」駅の目の前で、近くには市役所や図書館、コミュニティセンターやショッピングセンター、病院などがそろう、暮らしやすさは抜群だ。整然

してきた、まちづくり整備協議会会長の小野竹一さんは語る。

「新しいまちではコミュニティづくりが大きな課題になります。我々は2012年の11月にまちづくり整備協議会を立ち上げ、住む前からさまざまなルールをつくってきました。特に高齢者対策は力を入れてきたひとつ。高齢者が隣近所の人たちに守られて人生の終末に幸せな時間を過ごせるよう、元気な人たちが買い物や見守り活動などで手助けする仕組みもつくりました」

目標は「日本一のまちづくり」。どこよりも幸せなまちにしようという話し合いを重ねてきたという。「今回の完成は私たちが行政の手を離れ、真に自立して生活していくスタート」と小野さん。9月24日にはそれを祝した盛大なセレモニーを行う予定だ。その日こそ、本当のまちびらきであり、新たなまち、そして暮らしのグラウンドオープンになることだろう。



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます



最後の公営住宅が引き渡された東松島市・市営あおい住宅

と整備された区画には、瀟洒な新築の家が建ち並び、以前は田んぼだったという光景は想像すらできない。すでに2014年から順次入居が始まり、庭や玄関先を彩る花に、新しい暮らしへの喜びが現れているようだ。

今回の式典は、そのなかでも最後の36戸の引き渡しを祝って開かれたものだ。会場には、胸に紅白の花をつけた関係者と入居予定者が晴れやかな顔で集った。「今日は、入居する皆さんにとって、非常に待ち遠しい日であったことと思います」とスピーチの口火を切ったのは、阿部秀保市長だ。「これからは、安心して年を重ね

ていって生活できるのが何よりうれしいです。これから30年、50年と住みやすい生活が守られるよう、コミュニティづくりにも積極的に参加していきたいですね」と笑みを浮かべた。

式典に参加した東松島市建設部建設課復興住宅班班長の木村薫さんも「震災が起きてから、日にちの感覚もないほど、脇目もふらず突っ走ってきました。どうして